

れる。

須恵質・土師質という言葉の本来的な意味を用いるならば、この陶棺は土師質陶棺である。また、須恵器的な技法を用いて造形され、須恵器窯で焼成されていることを重視すれば、須恵質陶棺とする意見も当然出てくるであろう。しかし、意図的に酸化炎焼成を行って赤色系の発色を望んだものなら、須恵器窯で焼いたものであっても土師質陶棺と呼んだほうがよいのではないだろうか。

最近、岡山県古代吉備文化財センターが調査を行った熊山町土井遺跡の埴輪窯でも陶棺が出土している⁽⁹⁾。2基が確認された埴輪窯は須恵器窯と同様の登窯である。現地説明会で見た限りでは、焼成された埴輪の中に須恵質のものは見あたらず、陶棺も典型的な土師質陶棺である。この例も窯で焼成しながらも土師質に焼成しているものと考えられる。

註

- (1) 鎌木義昌・間壁忠彦「都窪郡山手村宿の陶棺墳」『吉備考古』第91号 吉備考古学会 1956
- (2) 横田美香「第6章 考察 4 北房町出土陶棺の編年」『定東塚・西塚古墳』岡山県北房町教育委員会 2002
光本 順「第6章 考察 5 6・7世紀における陶棺の変容とその特質—定東塚・西塚古墳出土陶棺の評価によせて—」『定東塚・西塚古墳』岡山県北房町教育委員会 2002
- (3) 浅倉秀昭編『山陽自動車道建設に伴う発掘調査 6 1.矢部古墳群A 2.矢部古墳群B 3.矢部大坑遺跡 4.矢部奥田遺跡 5.矢部堀越遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告82 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会 1993
- (4) 間壁葎子「岡山の陶棺—白猪屯倉への一私見—」『岡山の歴史と文化』藤井 駿先生記念論文集 福武書店 1983
- (5) 間壁忠彦「第五章 後期古墳の展開 第三節 内陸部の後期古墳」『新修倉敷市史』第1巻 考古 倉敷市 1996
- (6) 出宮徳尚・葛原克人・河本 清「第七章 古代」『岡山県の考古学』吉川弘文館 1987
- (7) 前掲註(2)光本論文
なお、ササラ谷(小棺)や寒田4号窯の身部蓋受け形状や、寒田4号窯陶棺の突帯形状などから、摂津を中心に分布するとされる「中井山3号グループ」との関係も考慮する必要があると考える。
- (8) 土師質亀甲形陶棺から須恵質陶棺への変遷を考えるうえで重要な点である。
- (9) 岡山県古代吉備文化財センター『土井遺跡現地説明会資料』 2002

第6節 備中南部における須恵器生産の展開

備中地域では最古の須恵器窯跡として総社市奥ヶ谷窯跡⁽¹⁾が存在する。5世紀前半の小規模な窯跡で、単発的な創業であると考えられている。この後、6世紀後葉の倉敷市江田池窯跡群⁽²⁾まで、150年近くの空白期が存在する。江田池1号窯跡では蓋坏や千鳥透かしを持つ長脚の高坏が採集されており、TK43に併行すると考えられる。寒田窯跡群4号は先述のとおり、TK209に併行する時期に操業を開始しており、江田池窯跡群に続く時期のものである。また、備中南部では金光須恵窯跡群もTK43の操業開始と言われている⁽³⁾が、公表された資料が少なく、詳細は不明である。

江田池窯跡群、寒田窯跡群が操業開始した6世紀後半から7世紀初頭にかけて、吉備では総社市うもり塚古墳・江崎古墳と最後の前方後円墳が築造される。この時期の吉備は井原市浪形で産出する浪形石製の家形石棺によって示される紐帯で結びつけられている⁽⁴⁾。

また、その被葬者が寒田窯跡群の操業開始に重要な役割を演じたと考えられる真備町箭田大塚古

墳は、吉備中枢地域へ浪形石製石棺を運ぶルート沿いに位置すると考えられるにも関わらず、浪形石の石棺は納められていない。しかし、その墳丘直径は約45mと吉備中枢の盟主墳である江崎古墳(墳長45m)を体積で大きく上回っている。これは、前方後円墳ではないが、吉備中枢を凌駕する墳丘を築けるほど、小田川流域の勢力が大きく成長していたことを示すものであろう。備中南部には高梁川東岸の吉備中枢勢力と、その風下に位置しながらも興勢途上の高梁川西岸(小田川下流域)勢力が並立していたと考えられる。

こうした政治情勢のなか、まず吉備中枢勢力により江田池窯跡群が操業を開始し、若干遅れて高梁川西岸勢力の主導によって寒田窯跡群が小田川の支流真谷川沿いに操業を開始したと考えられる。

寒田窯跡群4号に続く時期、正確には寒田Ⅱ期以後、窯の数は格段に増加し、生産の拡大をうかがわせる。総社市くもんめふ2号窯⁽⁵⁾の坏蓋は口径13cm前後から始まり、ヘラケズリが省略されたものばかりである。金光町上竹西の坊1・2号窯⁽⁶⁾、倉敷市道口窯⁽⁷⁾、同二子御堂奥3号窯⁽⁸⁾は坏蓋の直径が12cm前後で、上竹西の坊1号窯、道口窯はヘラケズリが確認でき、上竹西の坊2号窯・二子御堂奥3号窯ではヘラケズリが省略されている。蓋坏の直径及び調整とあわせて、これら5基の窯跡からは長脚二段透かしの高坏や提瓶が確認できず、寒田Ⅱ期以降の操業開始と考えられる。こうした窯の増加の背景は、やはり前方後円墳廃絶後の群集墳形成に伴う需要増大にあったことは想像に難くない。

また、この時期以後、つまり7世紀前半以後、吉備中枢地域において有力首長墓は知られていない。須恵器も集中した生産は行われず、二子御堂奥窯跡群、くもんめふ窯跡群、末の奥窯跡群など、数基単位の操業に分散する。瓦生産を行うところもあるがいずれも8世紀前半には操業されなくなる。

対する高梁川西岸では、7世紀中葉に切石に近い横穴式石室を持つ大型方墳、矢掛町小迫大塚古墳が築かれる。高梁川西岸(小田川下流域)勢力と吉備中枢勢力の力関係が逆転した結果と考えることも可能であろう。寒田窯跡群を含む玉島陶古窯跡群は備中最大の須恵器生産地となっていく。もちろん須恵器の生産には土や燃料となる木材の問題もあろうが、玉島陶地域が備中最大の須恵器生産地になっていく背景には、奈良時代の吉備真備輩出につながる高梁川西岸勢力の興勢があったと考えられる。

註

- (1) 柴田英樹「第5章 奥ヶ谷窯跡」『藪田古墳群 金黒池東遺跡 奥ヶ谷窯跡 中山遺跡 中山古墳群 西山遺跡 西山古墳群 服部遺跡 北溝手遺跡 窪木遺跡 高松田中遺跡 中国横断自動車道建設に伴う発掘調査4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121 日本道路公団中国支社岡山工事事務所 岡山県教育委員会 1997
- (2) 阿部泰久・中岡敬善「倉敷市矢部・江田池周辺の窯跡と陶板」『古代吉備』第9集 古代吉備研究会 1987
- (3) 武田恭彰「備中に於ける律令的土器様相の諸問題—地方の律令的土器様式の成立と変質—」『古代吉備』第18集 古代吉備研究会 1996

金光須恵窯跡群の資料としては、金光町立吉備小学校校庭拡張工事の際に出土した須恵器4点が岸名遺跡出土遺物として註(6)文献に掲載されている。図を見る限り杯身の直径はひずんだ状態の最大径が15cm以下で、底部外面に回転ヘラケズリを施すとされる。実際には直径は13cm程度考えられる。また、間壁忠彦先生の御厚意で岡山県古代吉備文化財センター

に保管されている同遺跡出土須恵器の写真をを見せていただいたが、その中には長脚二方二段透かしの高坏や提瓶などが存在している。これらを見る限りでは寒田Ⅰ期の範囲におさまりそうである。

- (4) この件については後日、別稿を予定している。
- (5) 武田恭彰編『奥坂遺跡群 鬼ノ城ゴルフ倶楽部造成に伴う発掘調査』総社市埋蔵文化財発掘調査報告15 総社市教育委員会 1999
- (6) 武田恭彰・井上 弘「上竹西の坊遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告69 岡山県文化財保護協会 1988
- (7) 武田恭彰「倉敷市玉島道口窯址採集の須恵器」『古代吉備』第9集 古代吉備研究会 1987
- (8) 葛原克人・池畑耕一「第Ⅴ部 二子御堂奥古窯址群」『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ(岡山以西)』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 第2集 岡山県教育委員会 1974